

教育学部における技術職員の役割と実習地の現状と課題

著者	池田 充
雑誌名	鹿児島大学農学部農場技術調査報告書
巻	18
ページ	11-12
発行年	2017-09
URL	http://hdl.handle.net/10232/00029824

教育学部における技術職員の役割と実習地の現状と課題

池田 充
教育学部 実習地

はじめに

教育学部の実習地は学部敷地内に位置するためその利便性を生かし、学生や教員また附属学校が利用しやすい圃場として活用されている。特に近年教育学部の特性を生かすために、栽培学習、実験実習また研究への技術支援に力を注いできた。また学部での実習地の存在意義を最大限に発揮するためさまざまな取り組みも行っている。そこで今回実習地の圃場運営方法の工夫や技術職員の多岐に亘る活動について、最近の状況を紹介する目的で報告する。

取り組み

学部の特性である教員養成学部として、学生が教師として赴任する際、栽培に関して無知な状態ではなく、ある一定の知識と経験を有してからの赴任が望ましい。しかし、現状は多くの学生の栽培経験が乏しいため、学校現場で経験者との指導能力の差が生じていると言える。また、その児童生徒への栽培指導能力不足から、栽培学習において作物の成長に著しい差や生育不良を起こしてしまい、最悪の場合枯死に至るとともに児童生徒に栽培意欲の低下を引き起こしているケースもある。

そこで、学生の時に授業以外に少しでも栽培経験の機会を増やしたく、実習地で鍬や農機具を使い栽培経験値を上げるための自主栽培を始めた、これは学生自ら色々な野菜を栽培し食することも目的に行っている。しかし、取り組み当初はなかなか学生の参加が少なく、その改善策として教員の参加を同時に募ったことなどが功を奏して、今では栽培圃場不足になるほど盛んになり、学生の絶えることのない圃場となっている(図1)。また、その経験を自ら教員採用試験の際にアピールする学生もおり、それが採用に役立つことも我々は望んでいる。

次に、教員支援では、例えば技術科の栽培実習で、受講生はまったく未経験者である状態から進めているために毎回時間を超過してしまうことが多く、授業時間の少なさから我々の納得する実習には未だ達していない。その対策として少しでも多くの栽培体験が出来るように授業以外でも栽培指導を行っている。また理科・家政科・美術科などの他学科の教員も実習地を利用している。たとえば、理科教育の授業では朝顔の栽培を学生に指導し、確実に発芽から開花して種子採取までを指導するとともに、ホウセンカの栽培では主幹道管の観察を行わせている。この栽培学習は学生が小学校教員として赴任した際には、現場で必ず教える内容であり、学生は真剣に実習に取り組んでいる。また昆虫や植物採集などの実習でも年間を通して圃場を利用されている。家政科では被服学で藍の栽培を行い、藍染めに関する学習だけでなく卒論でも活用しており、また技術職員との共同研究にも発展している。その他食物学分野では、圃場で栽培された野菜を収穫してから利用する調理実習がおこなわれ、実習地の野菜が有効活用されている。また美術科では陶芸の授業で、寺山自然研究施設から薪を持ち込み燃焼材として利用し、実習地の圃場内で焼成工程が行われている。

木材加工の教員からは卒業研究などで使用する炭焼き釜の製作を依頼され、高隈演習林から資材調達の協力を得て制作を行った。すでに卒論の一環として数回の炭焼きが行われている。

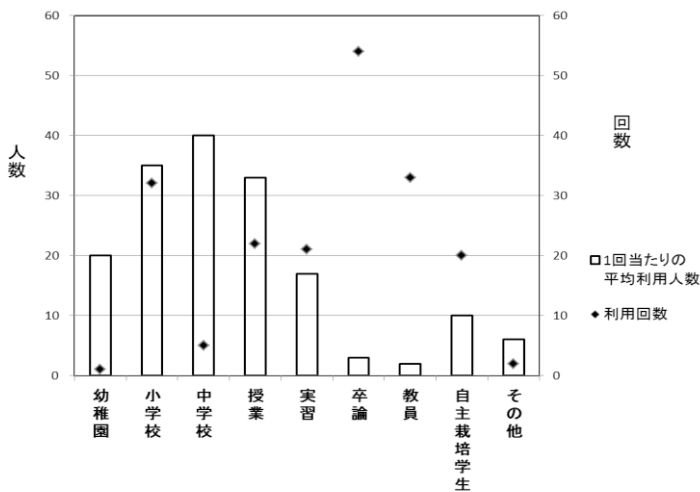
附属学校園4校には花苗支援を行い春と秋年2回花の配布を行なっている。苗は春11品種26種類の約1万本、冬は10品種16種類の8千本、合計約1万8千本の花を育苗し、そのうち約6割を附属学校に提供している(図2)。特に卒業式や入学式にはそれぞれ用の鉢植えを準備し、巣立つ園児、児童生徒や入学する子供達のために飾られている。花苗支援の他には小学校の理科の昆虫の変態に関する授業では、モンシロチョウの卵を採集するためのキャベツを教材として提供している。総合学習においては、給食残飯をコンポスト化で肥料にしてそれを用いて作物栽培を行い、育てた野菜を食する一連の体験型物質循環学習を支援している。これは栽培技術担当教員の重要な研究テーマとしても共同で取り組んでいる。また中学校でも技術の分野で栽培が必修化されているため、附属中学校の栽培学習も指導にあたっている。以上のように、実習地は附属学校園も頻繁に利用しており、教育学部の教育研究に重要な役割を果たしている。

技術職員の役割

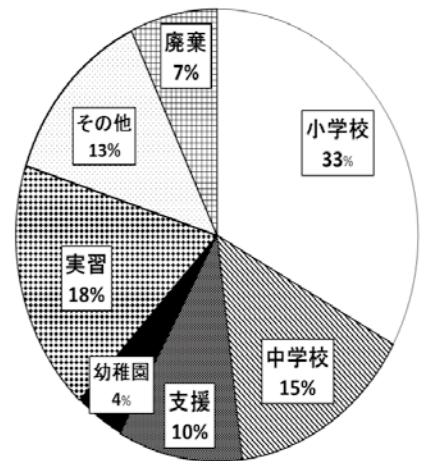
この様に教育学部の技術職員の仕事は多種多様化してきており、年間を通してそれらの業務に着実に従事している。技術職員は確実にその要望に対応出来るように、新たに技術を磨き勉強を行うことが重要である。また栽培関係においては、益々児童生徒・学生に指導する場面が増え、それに伴って教員の補助ではなく直接指導する機会が増えており、そのための対策や準備を行っておく必要がある。その他、附属学校からの要望にも臨機応変に対応するといったオープンな姿勢で受け入れている。また自ら研究テーマを持ちその研究成果を各地の研究会に出向き発表も行っている。このことは、自らの技術力の向上だけでなく、内外的に活動する機会や視野の幅を広げると同時に個人間の情報収集が可能になり、したがってそれらは我々技術職員の重要な仕事の一つである。また学生の卒業研究でも学生に一から技術指導を行いより正確で適確な指導に徹すると同時に、学生生活の様々な内容の相談相手としても心がけるべきであろう。

実習地の現状と課題

実習地では多くの学生や教職員に門扉を開き、自由に栽培する活動を行っている。しかし、実習地の圃場の狭さから作物栽培の問題である連作障害やいや地現象が発生している。この対策方法として薬品消毒などが考えられるが現状では隣接する教育施設に悪影響を及ぼさない対策方法を検討し実施して来た。しかしその方法で充分とはいえず、今後は他の(天地返し)方法等で農薬に頼らない方法に挑み対策を講じる予定である。また夏場の蚊の対策は急務である。教育学部の学生は実習等において教員などの指導があるにも関わらず露出度の高い服装で参加する学生が多い。そのため蚊の恰好の餌食として被害にあうケースが多い。また実習地に訪れる児童生徒なども被害に会うためその対策を市販の忌避薬で現在対応している。しかし、限界があるために他の方法での対策が必要である。以上多くの問題や課題を抱えているが、少しずつではあるが対策や解決方法を模索して改善していきたいと考えている。



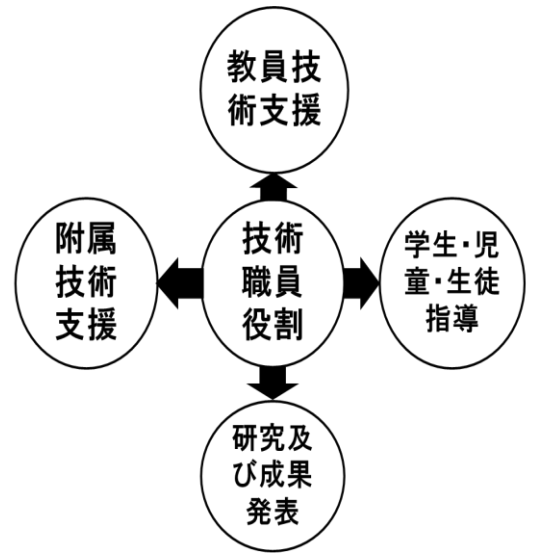
第1図、実習地利用区分別の利用回数及び平均利用人数



第2図、花苗育苗の利用目的と利用状況割

授業	実習	卒論
技術科	技術科	技術科
理科	理科	理科
家政科	家政科	家政科
美術科		

第1表、実習地利用区分の授業・実習・卒論の利用状況



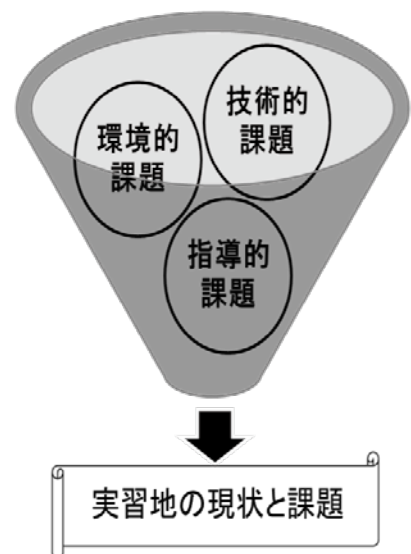
第2表、教育学部における技術職員の役割



第4表、附属小学校の総合学習への技術支援



第5表、附属中学校における技術授業



第3表、実習地の現状と課題